慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジャクソン期アメリカ : ある東部農民の生活と思索
Sub Title	Diary of a vermont farmer in the Jacksonian era
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.4 (1991. 1) ,p.926(126)- 948(148)
JaLC DOI	10.14991/001.19910101-0126
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910101-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」83巻4号（1991年1月）

ジャクソン期アメリカ
ある東部農民の生活と思索

岡　田　泰　男

はじめに

ジャクソン期のアメリカは今も昔も歴史家をひきつける魅力にあふれている。もちろんアンドリュー・ジャクソンという大統領の個性にも，その一因はあろうが，それだけではない。1820年代後半から1850年代の南北戦争前夜にいたるこの時代は，政治，経済，社会の動きや変化が著しい。19世紀アメリカを特徴づける工業化，都市化，西漸運動が本格化したのは，まさにこの時代であり，当時の合衆国は，後の独占期には感じられない若々しさに満ちている。それがトクヴィル，マルティノー，シュヴァリエをはじめ，ディケンズやトロロープ夫人など多くの外国人旅行者をひきつけ，かつ後の研究者の関心を呼ぶゆえんであろう。(1)

アメリカ民主主義に対する幻想が，とうの昔に消滅してしまっている現在では，ジャクソニアン・デモクラシーの基盤が，フロンティアの農民（ターナー）であったか，都市労働者（シュレジンジャー2世）であったか，それとも新興の企業家（ホフスタッター）であったかという論争は，いささか色あせてみえる。しかし，ベンソンの著作（1961）以降は，民族的，宗教的要素への関心のひろがりと共に，研究方法も多様化した。そしてペッセンの概説書（1969）によって，平等の時代，庶民の時代という神話に終止符がうたれて以来，かえって研究の地平はひろがった。信仰復興運動の拡大，近代家族の成立，女性の成長，都市労働者階級の形成，東部農村における資本主義の出現，西部における地域社会の意義など，北部のみに眼をかぎっても，ジャクソン期の研究は百花繚乱と

注（1）　最近のジャクソン期に関する研究については次を見よ。Edward Pessen, *The many-faceted Jacksonian era; New Interpretations* (Westport, Conn., 1977); Sean Wilentz, "Many Democracies: On Tocqueville and Jacksonian America," in *Reconsidering Tocqueville's Democracy in America*, ed. Abraham S. Eisenstadt (New Brunswick, N. J., 1988). わが国における研究については，安武秀岳「ジャクソン時代の政治と社会，1815-1850年」，『東京大学アメリカ研究資料センター年報』10，1987年。旅行者の印象についてはペッセンが要約している。Edward Pessen, *Jacksonian America; Society, Personality, and Politics* (Homewood, Ill., 1969), 5-38. Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, 1835, 1840, ed. J. P. Mayer (New York, 1969); Harriet Martineau, *Society in America*, 1837, ed. Seymore Lipset(New Brunswick, N. J., 1981); Michael Chevalier, *Society, Manners, and Politics in the United States* (Boston, 1839); Charles Dickens, *American Notes* (London, 1842); Frances Trollope, *Domestic Manners of the Americans* (London, 1832).

いえよう。ただし，一般庶民の実態への接近が進むなかで，かつて栄光につつまれていた彼等の肖像は，少々くすんできた感じがする。また，女性，労働者，移民に比べ，農民は陰にかくれ勝ちである。(2)

最近の研究から読みとれるジャクソン期の一般庶民像を，いくぶん意地悪くまとめてみると，こんな風になる。彼等は，民衆の時代，庶民の時代という宣伝につられて，選挙に出かけ，政治に参加したつもりでいるが，実は政党のボスたちにあやつられているにすぎない。禁酒運動に熱心な者もいるが，これは資本家の見えざる，もしくは明白な強制にもとづいた行動であった。信仰復興運動にしても，家庭における女性優位の時代の先がけともいえるが，多くは感情的で反知性的である。階級意識に目ざめた労働者もいるが，風変わりな理論をとなえる指導者に迷わされる者や，黒人，外国移民に偏見を持つ者が多い。ジャクソンのひきいる民主党を支持するのは，銀行や金融のことなど解らぬのに，怪物（すなわち銀行）に反感を持つ無智な大衆である。彼等を反資本主義的価値感，もしくは対抗する生き方の持ち主と見るか，あるいは時代に後ろむきの人びとと見るかは好みによるが，エマソンも言ったように，まともな人びとはホイッグ党（反ジャクソン）である。こうした中で，とくに同情に価するのは東部農村の若者で，彼等は西へ行くか，工場へ行くしか未来がない。もちろん，一部の居残った農民は，落着いた暮しを享受するが，それは時代のダイナミズムとは別の世界である。また，西部へ向うといっても，英雄的，個人主義の開拓者とはかぎらず，家族のしがらみの中で生きてゆくのである。ジャクソン期は魅力にあふれているとはいったものの，そこに生きた人びとのことを知ると，少々気がめいってくる。(3)

しかし，もう少し別の見方はできないであろうか。もちろん，上の文章は，いくぶん意地悪くま

注（2） Frederick J. Turner, *The United States, 1830–1850: The Nation and Its Sections*(New York, 1935); Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Age of Jackson* (Boston, 1945); Richard Hofstadter, *The American Political Tradition and the Men Who Made It* (New York, 1948); Lee Benson, *The Concept of Jacksonian Democracy; New York as a Test Case* (Princeton, 1961); Pessen, *Jacksonian America.* 1970年代中葉，アメリカの歴史家に対し「第2次大戦後に出版されたアメリカ史の著作中最も重要なもの5冊をあげよ」というアンケートがなされたが，シュレジンジャー，ホフスタッター，ペンソンの3冊はベスト5の中に入っている。このことは，ジャクソン期の人気をも物語っている。Allan G. Bogue, "The New Political History in the 1970s," in *The Past Before Us,* ed. Michael Kammen (Ithaca, 1980), 231–2. 最近の研究として一応，次のものをあげておく。Paul E. Johnson, *A Shopkeeper's Millennium; Society and Revivals in Rochester, New York, 1815–1837*(New York, 1978); Mary P. Ryan, *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790–1865* (Cambridge, 1981); Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: Women's Sphere in New England, 1780–1830* (New Haven, 1977); Sean Wilentz, *Chants Democratic: New York City and the Rise of the American Working Class, 1788–1850*(New York, 1984); Jonathan Prude, *The Coming of Industrial Order: Town and Factory Life in Rural Massachusetts, 1810–1860* (Cambridge, 1983); John M. Faragher, *Sugar Creek: Life on the Illinois Prairie* (New Haven, 1986); Hal S. Barron, *Those Who Stayed Behind: Rural Society in Nineteenth Century New England* (Cambridge, 1984).

（3） このまとめは，上記ポール・ジョンソン等の研究による。エマソンの文章は次のもの。Ralph W. Emerson, "Politics," in *Essays by Ralph Waldo Emerson, 2nd Series* (Boston, 1903, repr. 1979), 209–10.

とめたとはいえ，故意に暗くまとめたわけではない。一時期の民衆崇拝への反省から，ある程度醒めた目で見た結果をまとめると，上のようになるのである。しかし，これは，いかにも醒めすぎている。例えば東部農民の場合を考えてみよう。もはや自給農業から商業的農業へ，という類の図式的描写は姿を消し，内容が豊かになったことは事実である。しかし，以前の方が，変化を前向きにとらえようとしていたことも否定できない。今日の解釈では，東部農民は自給農業をしているわけではないが，前近代的価値感や思考様式に囚われている。その世界の中心は家族であり，家族の土地，農場の維持，保存に，彼等は全力をつくす。もはや土地取得，農場拡大の機会も限られているので，出生率も低下する。周囲の変化，都市化，工業化への不安，あるいは先の見えぬ不安から，宗教にひかれるものもいる。そして若者は村を離れてゆくというわけであり，受け身もしくは守りの姿勢が彼等を特徴づけている。一部には農業経営者と呼ぶ方がよい農民もいるが，彼等にしても，真に経済合理性を追求するのであれば，農業よりは商工業に従事すべきであった。(4)

19世紀の東部農村について，以前から興味を持ってきた私としては，こうした東部農民像にいささか不満である。もちろん，シュレジンジャー2世のような「思い入れ」がありすぎるのは困る。しかし客観的であることと冷淡とは異なる。センサスや土地譲渡史料のような資料を統計的に処理するから，人間味が薄れるということはない。出生率低下についてのイースターリンの統計的研究には，親が子を思う心がこもっているではないか。すでに統計的資料による研究や，散文的な金銭出納帖による論文は発表ずみであるので，ここで私は，あえて感情移入がしやすい農民の日記を材料に論文をまとめてみたい。それもたった一人の農民の日記であるが，その中に，ターナーや，シュレジンジャー2世や，ホフスタッターが見ていたような，若々しいジャクソン期のアメリカを再発見してみたい。(5)

1

「今日は薪をずっと運んでいたので疲れた。4日間というもの，薪か乾草を運び続けており，今週一杯それが続くだろう。農民の暮らしは，仕事はまあ辛いが，独立している。朝昼一生懸命働けば，夜は読書，書きもの，会話についやすことができる。そして，農民ほど，長い冬の夜を楽しく

注（4） 前記ハル・バロンの著書や，次の論文集を参照。Steven Hahn and Jonathan Prude, *The Countryside in the Age of Capitalist Transformation: Essays in the Social History of Rural America* (Chapel Hill, 1985). なお，対立する考え方を示すものとして，次の論文をあげておく。James A. Henretta, "Families and Farms: Mentalite in Pre-Industrial America," *William and Mary Quarterly,* 35 (Jan. 1978), 3-32; Winfred B. Rothenberg. "The Market and Massachusetts Farmers, 1750-1855," *Journal of Economic History,* 41 (Jun. 1981) 283-314.

（5） Richard A. Easterlin et al, "Farms and Farm Families in Old and New Areas: The Northern States in 1860," in *Family and Population in Nineteenth-Century America,* eds. Tamara K. Hareven and Maris A Vinovskis (Princeton, 1978); 岡田泰男「西漸運動と東部農村——ニューヨーク州の場合」『三田学会雑誌』73巻3号 (1980) 25-42; Yasuo Okada, "The Economic World of a Seneca County Farmer, 1830-1880," *New York History,* 66 (Jan. 1985), 5-28.

すごせる人間がいるだろうか。寒さの中で一日中働き，夕方になれば暖かい火のそばに，良き伴侶と座って，気楽にすごす。農民ほど独立した職業あるいは仕事が他にあるだろうか。いや，ひとつもありはしない。[6]」(42. 1. 27)

農民の生活を礼賛する日記の筆者は，教会で牧師の話を聞き，都会へ行く若者の愚かさを知る。「フラー師の説教を聞いた。彼は本当に興味深い話し手だ。彼は若者の愚かさについて語った。都会へ行く若者は，何と思慮を欠いていることか。彼は劇場に行く。そして劇場の次は，怪しげな家へ行く。」(41. 12. 28) それに比べて，農村で家庭を持つことは，なんと幸せなことだろう。彼が日記をつけはじめたのは，独立した家庭を持ってからであり，1ページ目には，こう記されている。「新しく家を持った。愛する伴侶とふたりだけで住み，何冊かの良い本を持ち，われわれだけで会話を楽しむのは，他の家族と一緒に住むよりも，どれほど嬉しいことだろう。もちろん他の人びとに対する親しい気持ちがある以上，彼等と交際したいとは思う。しかし，われわれだけで，いろいろ過去の事など考えてみたいときがある。そして，どの家族も，彼等だけで暮らし，彼等自身のものを持ち，独立していることを望むのだ。」(41. 11. 19)

こうした幸せが，しかし何時まで続くものか。時として大きな不安が胸をよぎり，神に祈らずにはおれない。「キリストの再臨を信ずる者の間では，この4月1日か4月3日に，キリストが現われ，小麦を毒麦から分け，その王国をおさめると考えられている。キリストは，誰もその日や時を知ることはできぬと言われた。しかし，いちぢくの木が葉をつければ夏が近いことを知るように，いろいろなしるしを見れば，再臨の日が戸口までやってきていることが知れるとも云われた。私には，この世の終りが近いように見える。神よ，われわれに知識と智慧を与え，まちがった説にまよわされず，あなたの言葉を正しく理解できる力をお与え下さい。……神よ，あなたが来られるときに準備ができており，あなたの宝石の中に加えられるよう，気をつけ祈ることを助けて下さい。」(43. 4. 3) 世の終りが1843年に来るというミラー派の教えは，当時かなりの信者を集めた。幸か不幸か，この予言は当らなかったが，日記の筆者は，これを一概に「まちがった説」として退けることはできなかったのである。[7]

さて，日記筆者サミュエル・デクスター・フランシス (Samuel Dexter Francis) は，アメリカ北東部ヴァモント州の農民で，1841年，日記をつけはじめたときは27歳であった。彼はウィンザー郡のバーナード (Barnard, Windsor County) という山村で父の農場を手伝っていた。ヴァモント州は山の多いところだが，バーナードはまさに丘陵地帯の村で土地も豊かでない。ハロルド・ウィルソ

注 (6) 本稿で利用した史料は下記のものである。Samuel Dexter Francis Diary, 1841～1862 (MSS) Yale University, Beinecke Rare Book and Manuscript Library. 日記の文章を引用する場合，後に年月日を記入し，いちいち註はつけない。(42. 1. 27) とあれば1842年1月27日の意味である。また本文中に年月日を記した場合も，註は省略する。

(7) ミラー派については，Ruth A. Doan, *The Miller Heresy, Millennialism, and American Culture* (Philadelphia, 1987); David M. Ludlum, *Social Ferment in Vermont, 1791-1850* (New York, 1939), 250-259; Whitney R. Cross, *The Burned-over District: The Social and Intellectual History of Enthusiastic Religion in Western New York, 1800-1850* (Ithaca, 1950), 287-321.

ンや，ルイス・スティルウエルが描いたような，経済の停滞と人口流出によって特徴づけられる農村のひとつである。フランシスは1842年からは父の農場を小作し，半ば独立するのであるが，45年には父が農場を手放してしまうので，結局，西部へ移住せざるを得ない。最初はイリノイ州へ移住して，7年ほど農業に従事するが，52年，さらに西の大地にひかれ，幌馬車隊に加わって大陸横断をはたし，太平洋岸のオレゴンへ到着する。日記は62年まで続くが，本稿で主にあつかうのはヴァモント時代である。なお，農民の日記は，天候と農作業のことしか書いてないものが多いが，フランシスのそれは政治・経済についての意見から読書の感想にいたるまで，非常に内容が豊富である。それがここに取り上げた理由でもある。(8)

ヴァモントの社会史を書いたラドラムが，コネチカット川沿いの豊かな平野地帯はホイッグ党支持だが，丘陵地帯には民主党びいきが多いと言っている。フランシスは，隣りのマサチューセッツ州の選挙で民主党が勝ったとき，「すべての民主党員は，貴族勢力の没落を喜ぶべきだ」(41. 12. 1)と書いていることからも分かるように民主党である。なぜ民主党かといえば，多分，ジャクソンの崇拝者だったからだと思われる。1844年1月8日の記述に「今日は，アンドリュー・ジャクソンが，ニューオルリンズでイギリス軍を大敗させた栄光ある記念日だ。われわれは，この勇敢な英雄をいつまでも忘れまい」とある。また，同年3月15日には「ニューオルリンズの英雄の77歳の誕生日だ。この尊敬すべき英雄ほど，敬意を払うに価する人物が他にいるだろうか。あるいは，すべてのアメリカ人が喜んで栄誉を与える人物が。今日はニューヨーク，ボストンほか多くの場所で，民主党員により，ジャクソンの誕生日を祝うお祭りがある」と記している。大衆レヴェルでのジャクソンの人気が，大統領をすでにやめた後も続いていたことがうかがわれる。(9)

さて，日記をつけ読書を好むという点では，フランシスは異例の存在ともいえるが，以上の如き日記の内容からして，彼の生活や意識が，一般農民と著しく掛け離れていたとは考えられない。彼は軍事的英雄であったジャクソンびいきの民主党支持者で，農村の暮らしは都会のそれより良いと自分に云いきかせてはいるが，どこかに不安もある。彼の農民生活礼賛には，当時，農業雑誌などでくりひろげられたキャンペインの影響も感じられる。というのは，東部農村から出ていってしまう若者が多かったので，彼等をひきとめようと，農民生活の美点および利点をたたえる演説や詩がしばしば掲載されたからである。フランシスが農業雑誌を読んだという記入は，ヴァモント時代にはないが，新聞や牧師の説教から類似の考え方をふきこまれたものと思われる。ところで，不安というのは，先に引用した如き「この世の終り」に対するものだけではなく，もう少し現実生活に密着した不安もある。(10)

一寸ふれたように，フランシスは父の農場を小作するという形で経営をひきつぐ。1843年4月24

注（8） Harold F. Wilson, *The Hill Country of Northern New England, Its Social and Economic History, 1790-1930* (New York, 1936); Lewis D. Stilwell, *Migration from Vermont, 1776-1860*, Proceedings of the Vermont Historical Society, Vol. 7, No. 2. (1937).

（9） Ludlum, *Social Ferment*, 6-21. なお，次を見よ。John W. Ward, *Andrew Jackson, Symbol for an Age* (New York, 1955).

日，「今年は父の農場を折半で借り，若者を1人，月5ドルの賃金で7カ月間雇った」と記す。前年は父親が種子その他を提供したので，彼の取り分は収穫の3分の1であったが，この年は2分の1になったのである。しかし前途は楽観できなかった。彼はつづけて書く。「どうやったら上手くゆくか，私には分らない。景気は悪く，農産物の価格はすべて非常に低いし，家畜は4年前の半分の価値しかない。とうもろこしはブッシェルあたり50セント，オート麦20セント，羊毛は多分（ポンドあたり）25セント，バターはいくらで売れるか知らない。他のものも，その程度の相場だ。しかし，私はやってみよう。そして何ができるか見よう」というのである。この年は，自分で種子を用意しなければならないので，翌々日，同じ村のチェンバレンという人のところへ種小麦を買いに行く。こうした取引きは，通常は掛けだが，このときは現金でなければ売らぬと云われる。「……彼は沢山，種小麦を持っている。……しかし，穀物を信用で売るやり方は嫌いで，それくらいなら売らぬ方が良いという。あわれな男よ。……なんと失敬な奴だ。まあ，いつか，彼が他人から恩恵をほどこされる時もあろう。おお！　私をかかる利己主義から救いたまえ」(43.4.26) とフランシスは憤慨した。

こうして見てくると，この日記の筆者は，まさに最近の研究が示している東部農民像に適合するかのようである。農村での家族の生活に満足を見出そうとするが，実際にはそれを続けることは困難で，英雄を利用した政治に踊らされ，不安につけこむ宗教に影響されやすいというところか。一般庶民の向上とか，民衆の知的興隆とか，下からの民主主義とか，かつて説かれていたようなジャクソン期の壮観さは，幻想か表面的現象にすぎない。トロロープ夫人のようなアメリカ嫌いの外国人が描いた，魅力のない人びとこそアメリカの庶民の実像で，われらがフランシスも，その証人のひとりにすぎぬようにも見える。しかし，その結論は，いささか早すぎる。この農民の日記をもう少し読んでゆくと，彼の生活と思索が，上記の情けない庶民像に変更をせまる力を秘めていることが分る。ジャクソン期の庶民，しかも立身出世などできなかった農民の中にも，自分なりに自由と民主主義を信じ，政治と経済を分析し，宗教や歴史について考えた人間がいたことを，フランシスの日記は示している。この無名の東部農民は，ジャクソン期の庶民を，反知性的とか前近代的とか片付けてはいけないことを示すと共に，この時代の再評価への道をもひらいてくれる。

2

1839年にボストンで出版された『ニューイングランド地理案内記』によれば，フランシスの住んでいたバーナードという村は，1774年に開拓が始まった。土地は高いところにあり，独立戦争のとき，130マイルも離れたバンカー・ヒルの戦闘の砲声が聞えたという。丘陵地なので牧畜に適し，

注 (10) 農業雑誌については下記を見よ。Donald B. Marti, *To Improve the Soil and Mind: Agricultural Societies, Journals, and Schools in the Northeastern States, 1791–1865* (Ann Arbor, 1979); Sally McMurry, "Who Read the Agricultural Journals? Evidence from Chenango County, New York, 1839–1865," *Agricultural History*, 63 (Fall, 1989) 1–18.

牛，羊，バター，チーズ，羊毛が主たる産物である。村の中央に美しい池があり，そこから流れだした川沿いに水車場がある。また，じゃがいもから，でんぷんを製造する工場がある。1830年の人口は1,881であった。(11)

実は，この1,881名という数字は，バーナードの人口のピークであり，1791年の673名から，ここまで増加した住民が，1840年には1,774名と減少しはじめ，その後も漸減してゆく。開拓の始まりが独立戦争前夜と，ニューイングランドにしては遅かったのに，成長期の終りは早かった。ハロルド・ウィルソンは『ニューイングランド北部丘陵地帯』の中で，1790年から1830年を「夏の時代」1830年から1870年を「秋の時代」と名付けているが，バーナードにおいても輝かしい夏は短かかった。ルイス・スティルウェルの『ヴァモント州からの移住』の中で，1830年から1840年は「大移住」の時期とされるが，その理由は牧羊業の発展で小農場が吸収され，人手もかからなくなって，若者が西部や都会へ出て行ったからである。『ヴァモント・クロニクル』紙（1834年10月17日）には，次の如き記事が出た。「西部移住熱に気をつけろ。何よりも，金持ちの隣人に農場を売って，牧羊場にしないこと」とある。(12)

バーナードの郷土史家ウィリアム・ニュートンによれば，村の耕作可能な土地は，1810年頃までには，すべて取得されてしまって，10年代中頃からは西部への移住が始まった。ただし，この頃の「西部」とは，ニューヨーク州のことである。とくに1815年から17年にかけての冷害が，移出をうながした。1830年から40年にかけても，農民や手工業者にとって苦しい状況が続き，この時期にはマサチューセッツの工場町への移住も生ずる。とくに1835年，マサチューセッツ州ウェア（Ware）に，200名以上の村人が移住した。この中には大工，鍛冶屋，馬具屋，馬車屋などが含まれていた。例のマクレーン報告（1832年）によれば，ウェアの町には綿工場や毛織物工場があり，ハンプシャー工業会社では男子58名，女子204名，児童11名が雇用されていた。また，麦わら帽子製造のフェアバンクス工場には，500名の女子が働らいていた。他にも馬車，馬具，かばん，ブリキ製品，時計などがつくられていたとある。バーナードの住民は，やがて，イリノイなどの中西部，そして金の発見されたカリフォルニアなどへも移住し，放棄された農場が残されるようになる。ジャクソン期といえば，成長とか興隆とかいう言葉がつきものであるが，ニューイングランドの丘陵地帯では事情は違った。ウィルソンのいう「秋の時代」も，実りの秋ではなく凋落の季節である。かかる秋の時代のバーナードで，フランシスは，いかに暮らしをたてていたか。(13)

先にふれたように，フランシスが耕しているのは父親の農場であり，分益小作として経営している。日記に出てくる生産物の種類を拾うと，とうもろこし，オート麦，小麦，じゃがいも，乾草，

注 (11) John Hayward, *The New England Gazetteer* (Boston, 1839) Barnard, Vt. の項。（ページ・ナンバーなし）

(12) Wilson, *Hill Country;* Stilwell, *Migration from Vermont,* 171-196. 引用は173頁より。

(13) William M. Newton, *History of Barnard, Vermont,* 2 vols. (Vermont Historical Society, 1928) 移住について 1, 272-4; *Documents relative to the Manufactures in the United States* (McLane Report, 1832), Mass. Doc. 3, No. 115, (1, 300-303).

かえで糖，野菜などであり，羊，馬，牛，豚を飼育している。ところで，作付面積や収穫量は，ごくわずかであって，1843年から44年にかけての記録を見ると，とうもろこし2エーカー（40ブッシェル），オート麦2エーカー（40ブッシェル），小麦2～3エーカー（26ブッシェル）程度であり，自分の取り分はその半分であるので，ほぼ自給用と考えてよい。現に，1842年，「1エーカー植えたとうもろこしの出来が良く，25～27ブッシェルとれる。（この年の）自分の取り分は3分の1で，8～9ブッシェルになるから，多分，自分が食べるには十分だろう」（42.11.3）とある。かえで糖についても，「砂糖かえでから樹液を集めるのは辛い仕事だが，この時期はほかにたいしてすることはないし，自家用の砂糖と糖蜜をつくるのは，大変な節約になる」（42.3.16）と記している。(14)

売却の記録があるのは羊毛と，じゃがいものみである。羊毛に関しては「ホワイト・リヴァーに売りに行ったが駄目だった。羊毛と引きかえに毛織物をくれると言うが，私は現金がほしい」（42.10.27）「ウッドストックにもう一度羊毛を売りに行く。ポンドあたり22セントで売ったが，ひどく低い価格だ。この夏には25セント，春なら28～30セントで売れたのに，もっと値上りするだろうと思い待っていた」（42.11.1）とある。ホワイト・リヴァーやウッドストックは，10～20マイル離れた町で，フランシスは，ときどき出かけている。じゃがいもは，バーナードにでんぷん工場があったので，他所へ売りに行かずにすむ。1842年の収穫量は231ブッシェル，その3分の1の77ブッシェルがフランシスの取り分であるが，その中から自家消費分を残し，45ブッシェルを工場に売る。「ブッシェルあたり1シリング（12.5セント）だが，これでも豚の飼料にするより良い。豚肉は今のところ安いので，じゃがいもを飼料にして豚を売っても，ブッシェルあたり6セントの儲けにもならない」（42.10.14）とある。

その他，乾草を売った場合もある。ただしこのときは「乾草を売って，その量を減らすのは良くないやり方だと思う。しかし，現在では仕方がない」（42.1.24）と書いている。冬の長いヴァモントで，家畜の飼育を中心とした農場経営をする場合，冬期の飼料としての乾草の確保は極めて重要であった。それ故，上記のような記入となったのであろう。バーナードの村は，9月末には霜が降り，10月には雪がふる。そして冬は長く，春の遅い年には5月末から6月に入っても雪がふることがある。乾草作りの季節は7月から8月にかけてであるが，雨が多かったりするとあまりとれない。それだけに，乾草が十分に作れた年の満足感は大きい。1844年9月4日に「今年の乾草作りを終った。納屋いっぱい，棟木のところまでつまっている」とある。

フランシスの農場の収支計算は，日記からでは分らず，また，彼が他に勘定帖をつけていた様子はない。しかし，いずれにせよ，あまり豊かな農家であったとは考えられない。もちろん自給自足農業ではないが，牧羊とじゃがいもの商品生産を中心とする零細経営で，やがて金持ちの隣人に買いとられる運命にあったものである。もっとも，フランシスはそれなりに努力していた。羊を購入

注（14）当時のニューイングランド農業について，一般的には次を見よ。Clarence H. Danhof, *Change in Agriculture: The Northern United States, 1820–1870* (Cambridge, Mass., 1969); Howard S. Russell, *A Long Deep Furrow, Three Centuries of Farming in New England* (Hanover, N. H., 1976), 325–414.

した際には「良い品種の羊を飼うのも，良くない品種を飼うのも手間は同じだ。そして良い品種の方が早く増えるし，利益は2倍か3倍になる」(41.12.20) と言っているし，とうもろこし，小麦，じゃがいも畑には，十分に肥料を施している。1843年以外，手伝いは雇わず，すべて自分1人でやっているが，乾草作り，じゃがいも掘りなどのときは，隣人と労働を交換している。ただ冬の薪を準備する際には「手伝いと一組の役畜があれば，前もって木を切り，運んでつみ上げ，よく乾かせるのだが。そうすれば，薪も少くてすみ火もよくおきるし，他の仕事と重ならず好都合なのに」(44.11.20) と嘆いている。

たとえ零細経営であっても，農民の仕事は多い。フランシスも「なんと，いろいろな仕事を農民はしなければならないことだろう。ほとんど毎日，何か新しい仕事があって気を抜けない」(42.5.2) と言っているが，まさにそうである。農民の1年は，通常，春のすき起しに始まるが，フランシスの場合，その前にかえで糖作りがある。これが3月半ばから4月にかけて，続いて農場の柵などをつくろい，4月下旬にすき起しが始まる。肥料を運び，春小麦，オート麦，とうもろこし，じゃがいも，野菜などをうえるので，5月は非常に忙しい。「仕事がとてもきついので，夜になると，日記をつける気もしない」(42.5.20) ほどだ。6月に入ると，とうもろこし畑の中耕，除草があり，羊の毛を刈る。7月と8月は乾草作りにかかりきりで，9月になれば小麦やオート麦の収穫，じゃがいもやとうもろこしの収穫も始まる。じゃがいも，とうもろこしは10月まで収穫が続き，それが終ると小麦等の脱穀がある。これは11月に入ってからだが，すでに雪の日もある。冬の間は木を切ったり，薪を運んだりすることが多いが，零下13度（華氏）という寒さの中での仕事という場合もある。長い冬が過ぎ，春の雪が降って，かえでの樹液が流れ出すと，次の1年がめぐってくる。

さて，辛い仕事にもかかわらず，フランシスは経済的には恵まれなかったようである。例年，1月初旬に，教会の牧師へ農産物，衣服その他を，教会のメンバーが寄付をする行事があった。「私は今のところ，あまり寄付できるとは思わない。しかし，聖書に，寛大な者は豊かにされる，とあるので，教会に行くことにし，妻のエリザベスを連れ，少しばかりの善意を表した。私はフラー牧師に，黒いラシャ地，チョッキ一着分を贈った。2ドルくらいのものだ」(42.1.12) と記しているが，これが精一杯であったろう。これはフランシス個人の農家経営の才能などには関わりのない周囲の環境のせいでもあった。ヴァモントの農業は，凋落の時期を迎えていたし，羊毛価格も低かった。1836年まで上昇していた羊毛価格は，37年恐慌で下落し，その後，40年代に入っても回復しなかった。1843年4月12日，フランシスはこう書いている。「とても景気が悪い。どこにもお金がない。こうした不景気が続くなら，多くの人が破滅するだろう。ほとんど誰もが貧しく，お金がないので，どうすれば良いか分らない。」こうした時期に，父親の農場の小作という形で出発しなければならなかった彼は，不運であったとも言えよう。

かかる状況の中で，フランシスは彼なりに経済を分析し，それを当時，政権の座についたホイッグ党の政策と関連させて考えてゆく。彼の経済，政治についての見解を次に見よう。

3

アンドリュー・ジャクソンが大統領に就任した1829年以来，民主党は政権を握っていたが，1840年の大統領選挙で対立するホイッグ党が勝利をおさめた。民主党は南部の綿花生産者とのつながりから，ほぼ低関税政策をとっていたが，ホイッグ党は，製造業者に有利な保護関税を支持した。したがって1842年に成立した関税法では税率は高められた。もっともホイッグ党は，高関税が製造業を保護し，国内市場を拡大することによって，農民にも利益を与えると主張していた。フランシスが，父の農場の小作を始めたのはその1842年のことであり，同年秋，羊毛を売りに行った彼が低価格を嘆いた日記の文章は，すでに引用した。ところで，彼はそれに続けて，こう書く。(15)

「ホイッグ党は，関税があれば羊毛価格は上がると言った。今や彼らの望んだ関税はあるのに，羊毛の値はまだ下がり続けている。政治におけるホイッグの知恵とは，その程度のものだ」(42. 11. 1)。1842年の関税は，羊毛の生産者を保護する目的で，外国から輸入される羊毛の関税率を上昇させた。1830年代を通じて，南半球からの羊毛輸入が増大し，それが価格下落の一因と考えられていたからである。このときの税率は，ポンドあたり8セント以下の羊毛には5パーセントの従価税，8セント以上のものは，ポンドあたり3セント及び30パーセントの従価税というものであったが，外国からの羊毛は安価な方が多かったので効果はなかった。輸入は増え続け，とくにアルゼンチンからの羊毛が大量に流入した。さらにいえば，アメリカ西部において牧羊業が発展していたから，ヴァモントの羊毛生産者は保護されるどころか，国内での競争にもさらされていたのである。(16)

フランシスは，ホイッグ党の関税政策は結局，製造業者を利するのみだと考える。「すべての農産物価格は非常に低い。一方，工業製品の価格は上昇している。関税によって保護されている者には良い時勢だが，農民は吸いとられて死んでしまう」(44. 3. 6) とか，「今や農民は貴族主義的立法によって打ち砕かれ，徹底的に打ちのめされた。関税その他によって，農民は，その資本に対し2～3パーセントの利益しか上げられないのに，製造業者や企業は10から40パーセントも利益を上げている」(44. 11. 12) という具合である。また，1842年の州議会の選挙の際には，次のようにホイッグ党を攻撃する。「彼ら（ホイッグ党）は，民主党はいかなる関税にも反対し，自由貿易と直接税を支持すると宣伝している。民主党は，直接税が原則として共和主義的だと考えるが，それを主張したことはないし，政府を経済的に支えるに必要な程度の関税には賛成してきた。ホイッグ党が支持するのはJ・Q・アダムズ以来の，旧来のフェデラリスト型の高率保護関税だ。しかし彼らは，それが農民や労働者をも保護すると信じさせている。」(42. 9. 6)

当時の関税をめぐっては，それをいかなる利害が支持したか，それがいかなる効果を持ったか等

注 (15) ジャクソン期の経済については，Pessen, *Jacksonian America*, 93-153; Peter Temin, *The Jacksonian Economy* (New York, 1969).

(16) 羊毛と関税についての古典的研究は Chester W. Wright, *Wool-Growing and the Tariff, A Study in the Economic History of the United States* (Cambridge, Mass., 1910).

について，学者の間にもいろいろな説がある。しかし，フランシスは，至極明確に，ホイッグ党の関税は製造業者に利益を与えるものであり，フェデラリストの伝統をひきつぐ保護関税だと考えている。フランシスが，どこから，こうした考え方を学んだかについては後にふれることとするが，ともあれ彼の頭の中では，民主党とホイッグ党の経済政策は，はっきり対立している。そして，農民であるフランシスは，ホイッグ党の関税によって利益を与えられてはおらず，それに反対である。但し，彼の意見は，自分の直接的経済的利害にのみ結びついているわけではない。この点は，通貨の問題についての彼の考えを見れば明らかである。(17)

ジャクソン大統領が硬貨主義者であったことは良く知られている。それは何らかの経済理論にもとづくものではなく，彼の個人的信念によるものであり，必ずしも当時のアメリカ経済の実情に即していなかった。拡大しつつある経済は，それに見合う通貨量の増加を必要としており，硬貨だけでは不十分だったからである。しかし，ジャクソンと彼を支持する民主党員は，銀行と紙幣を敵視し，それを特権と投機と不正の源泉とみなしていた。フランシスもまた，忠実なるジャクソン支持者であった。1841年12月15日，ホイッグ党のタイラー大統領の教書を新聞で読み，次のような感想を記している。「紙幣制度が導入されなかった方が良かったろうという発言，さらに，それがなかった方が社会はより幸福だったろうという意見の正しさは，経験によって証明されており，物を見る眼のある人なら誰でも分る。大統領の見解は，彼の正直な確信を示している。……全体として，ホイッグ党の大統領にも，ある程度の民主主義があると云える。(18)」

その数日後，トマス・H・ベントン上院議員の国会での発言にふれて，次のように記す。ベントンはジャクソンと同様，硬貨主義者である。「彼（ベントン）は，財務省が紙幣を発行したり，手形取引にかかわることは，憲法違反であり，危険であるとして反対している。わが憲法がつくられたとき，紙幣発行の件が討議され，かつ否決され，この政府を硬貨主義の政府と明白に決めた事実は，よく知られていない。われわれの政府が手形の売り手になったり，為替の売買をしたり，紙切れやくずを売買することに賛成する民主党員がいるだろうか。われわれの政府が手形割引や投機をする所になったら，どうするのか。何と有害で危険なことだろう。」(42. 12. 21) さらに，大統領の手形交換についての発言にふれ，「いったい，政府が手形交換を規制してどうなるのか。手形交換などは商人や業者にまかせれば良い。いや，商取引それ自体にまかせれば良いと私は思う」(42. 12. 23) と記す。

すでに述べたように，ジャクソンの硬貨主義は必ずしも理論的裏付けがあったわけではなく，ベ

注 (17) 民主党とホイッグ党の政策について，下記の書物は明快だが図式的すぎる。John Ashworth, *Agrarians and Aristocrats: Party Political Ideology in the United States, 1837–1846* (Cambridge, 1983). なお，次を見よ。Lawrence F. Kohl, *The Politics of Individualism: Parties and the American Character in the Jacksonian Era* (New York, 1989).

(18) 銀行問題については，Bray Hammond, *Banks and Politics in America, from the Revolution to the Civil War* (Princeton, 1957); Hugh Rockoff, "Money, Prices, and Banks in the Jacksonian Era," in *The Reinterpretation of American Economic History*, eds. Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman (New York, 1971).

ントンのそれも同様だった。まして，フランシスのような一般庶民のレヴェルでの硬貨主義は，経済の常識を欠いた人びとが，民主党のスローガンに追従しただけとの印象もある。しかし，フランシスの上記の文章は，単に彼が紙幣に反対しているのみならず，政府と経済との関係について，もしくは政府のあるべき姿について，一本筋の通った考え方を持っていたことを示している。彼がホイッグ党の保護関税に反対したのも，それが農民に不利だったから，という理由にのみもとづくものではなかった。「われわれの政府が手形の売り手になったり……」という文章や，「いったい，政府が手形交換を……」という文章，とくに「いや，商取引それ自体にまかせれば良い」という言葉は，明らかに，政府が経済に干渉することに反対する立場を示している。民主党が自由放任政策をとったか否かについては議論が分かれるところであるが，少くともフランシスにとっては，民主党は自由放任，経済不干渉の政党であり，もしくはあるべきであった。とくに，製造業者のみを利するような保護関税や，投機に結びつくような紙幣発行は，社会正義の上からも，社会の「幸福」のためにも許さるべきではなかった。フランシスは，それを「民主的」でないと考えたのである。

「デモクラシー」という言葉は，フランシスの日記にしばしば出てくるが，これを一般的に「民主主義」と受けとるべきか，むしろ「民主党」と解釈すべきかは，文脈により，その都度異なる。フランシスの民主党支持はヴァモント時代に限らず，イリノイやオレゴンに移住してからも続いている。いわば一貫した民主党支持者であり，かつ，民主党こそ「民主的」もしくは「民主主義的」であるとの信念を持っていた。関税や紙幣と並んで，当時問題となっていた破産法についての彼の意見がこれを示している。1837年恐慌以後の不況の中で，破産する商工業者は多かったが，当時は連邦法としての破産法はなく，その成立が求められた。1841年に成立した破産法は，債務者の側からの自発的申立てを，債権者による申立てと同様に認めるものであったが，民主党は大勢として反対の立場をとった。投機的商人はその危険を完全に負うべきであり，破産申立てにより債務の一部を免除さるべきではなかった。借金は支払わねばならぬという原則が，投機の横行を制限するのであり，ここをゆるめてしまえば，再び恐慌前の如き状況が生ずると考えたのである。1842年，破産法の廃止が下院では通ったが，上院では否決された。このとき，フランシスは書く。(19)

「下院で破産法が126票対94票で廃止された。人びとはその廃止を求めて請願を送っていたが，ホイッグ党の中にも民主党に同調する者がいて，廃止となった。それは偽りと不義の愛の産物であったが，彼らは，高潔で民主的な人びとを欺けぬことを知って，生まれる前に首をしめた」(42. 1. 28)「上院が破産法廃止を否決したというニュースを知った。廃止賛成は民主党16，ホイッグ党6，反対はホイッグ党21，民主党2の1票差だった。この投票結果は，どちらの党が，この憲法に反する不公平で不正な反民主的法律を支持しているかを示している」(42. 2. 15)。この文章から，フランシスが，公平，正義，民主的というような価値を，人びと（ピープル）と結びつけ，かつ民主党と結びつけていたことが分かるであろう。

注 (19) 破産法については次を見よ。Glyndon G. Van Deusen, *The Jacksonian Era, 1828-1848* (New York, 1959), 161-2.

民主党のよって立つべき原則について，彼がイリノイへ移住した後に書いた日記を引用しよう。「イリノイで初めて投票した。しかし，少々納得できないところもあった。民主党は3人の法律家を候補に指名したが，その指名にあたって策略と不公正な方法が用いられたようだ。すでに長らく官職にあった3人の法律家を選び，農民や他の職業の人びとをしめ出すのは正しいとは思えない。官職の交替と権利の平等が私のモットーだ。しかし私はホイッグ党へは投票できない。最良の方法は，いつも通りに投票し，次回はより良い人を選ぶことだ。」(47.4.19) さらにオレゴンへ移住しても「選挙に行く。私がいつもそうしているように民主党候補者に投票した」(54.6.5) とある如く，フランシスの支持政党は変らない。1854年といえば，奴隷制をめぐる南北対立が，カンザス・ネブラスカ法によって激化し，ホイッグ党と民主党の奴隷制反対派が共和党を結成した年であった。フランシスは，ジャクソン期の，いわば良き時代の良き民主党のイメージを持ち続けたのであろう。その良き時代にはぐくまれた彼の政治的信念について，もう少し検討しよう。(20)

4

フランシスがヴァモント時代に住んでいたバーナードは，民主党の強い土地であった。1842年3月7日「今日はタウン・ミーティングへ行った。タウンの役員を選び，タウンの事務を処理するためだった。民主党はタウンの役人の大半をしめた。書記，治安官，収入役，委員等々。もしかしたら，タウンの役職のすべてをしめることもできたが，そう強く出ない方が良いと，われわれは考えた。民主党であると言う以上，実際にも民主的であるべきで，ホイッグ党の轍を踏むべきではない」と記している。翌年9月5日にも，「われわれの選挙の日，そして民主党にとって栄光の日だった。民主党員は立派にやってのけ，チャールズ・ウォルコットを州議会議員に21票差で選んだ。党内にはいく分不満もあったので，かなりの票がホイッグ党に流れると予想されていた。しかし，バーナードはその真の利益に忠実であり，その義務を立派に果した」とある。(21)

ところで，フランシスのモットーは「官職の交替と権利の平等」であり，これは彼の考える民主党のモットーでもあったろうが，それをホイッグ党との比較で眺めてみたい。ニューイングランドは一般的にホイッグ党の地盤が強かったが，1842年の州及び中間選挙の際には民主党が勢力を伸ばした。フランシスは次のように記す。「コネチカットからの良いニュース。民主党は多分ホイッグ党に全面的に勝った。……人びとの冷静な再考が効果を示しはじめた。人びとはホイッグ主義がいやになってきた。その偽りの約束や腐敗にいや気がさしてきた。」(42.4.12)「マサチューセッツの選挙の結果を知る。これは権利の平等を愛するすべての民主党員にとって喜ぶべきニュースだ。これは近年の最も堂々たる民主党の勝利のひとつだ。貴族主義者は1839年を除き18年間にわたって支

注 (20) Robert V. Remini, *The Legacy of Andrew Jackson: Essays on Democracy, Indian Removal, and Slavery* (Baton Rouge, 1988) を参照せよ。

(21) ヴァモントの政治については，Ludlum, *Social Ferment* を見よ。

配しつづけてきたのだから。おお，デモクラシー，すべての人の平等な権利を保つ，何と輝かしい原則だろう。」(42.11.22)

以上に明らかな如く，ホイッグ党は虚偽と腐敗の政党であり，何よりも貴族主義の政党である。権利の平等を主義とする民主党は，民主主義の政党である。フランシスの頭の中では，両党の対立は，貴族主義対民主主義としてとらえられている。そして，ホイッグ党は，関税について述べた際ふれたように，フェデラリストの伝統をつぐものとされている。このことは，1844年の大統領選挙のときの日記からも読みとれる。「私はポークとダラスに投票した。ヴァモントがフェデラリズムから解放されて，ポークとダラスに票を投ぜんことを」(44.11.12) という一節である。実は，この後に，先に引用した「今や農民は貴族主義的立法によって打ち砕かれ，徹底的に打ちのめされた」という文章が続くのであって，フランシスの考えている両党の対立は，もっと鮮明になる。すなわちホイッグ党は，フェデラリスト，貴族主義，そして製造業者の利害を代表する。他方，民主党は民主主義であり，フェデラリストに反対したジェファスンの伝統をつぐ農民の政党なのである。ジャクソン期の東部農村に住む一庶民が描いた政治の見取り図はかかるものであり，伝統的な（今では古いとされている）歴史家の解釈に近いものだった。

そこで次の問題は，フランシスが如何にして，上記のような信念を持ち，また見取り図を描くようになったか，という点である。もちろん，タウンの住民として，また農民としての生活の中で，彼の信念ははぐくまれたのであろうが，これでは答えにならない。もう少し直接的な知的背景を探ってみよう。まず彼のとっていた新聞がある。「ボストン・ステイツマン紙を読む。これには非常に多様な面白い記事がのっているので，それを読んで夕方を楽しく過すことができる。しかも，他紙のような軽い無駄な記事ではない。それはフィクションはあつかわず，健全な民主的現実をあつかっている」(42.12.8)「町へ出かけ，ニューヨーク・プレビアン紙の購読を申しこむ。年1ドルでとても安いし，ボストン・ステイツマン紙より読みものが多い。これはニューヨーク市の代表的民主党系新聞で，よく編集されている」(43.12.16) とあるように，彼は民主党系の新聞の愛読者であった。「ジョージ・バンクロフトが，マサチューセッツ歴史協会でおこなった講演の抜粋をボストン・ステイツマン紙で読む。すばらしい講演だ」(42.1.4) という記入もある。バンクロフトは歴史家と政治家をかね，マサチューセッツにおける民主党指導者の一人であったが，新聞には，こうした読みものも多かった。

彼の知的世界の中で，新聞が大きな位置をしめていたことは，イリノイへ移住後，「読むものとしては，たまにシカゴ・デモクラット紙を読む。私は，ステイツマンやアーガスのような良い新聞のないのが淋しい」(47.1.1) と記していることからも知られよう。また「ボストン・ステイツマン紙で，パリ特派員の書簡を読む。それはイギリスと合衆国の間にある問題の本質を示している。……そして，イギリスの利己的で貪欲な精神をはっきりと示している」(42.4.1) とあるように，国際的問題をも含めて，政治，経済等についての判断材料として，新聞は重要だった。但し，フランシスの考え方が，すべて新聞に影響されたものとするのは正しくない。例えば，次の文章は，彼

の信念がより深いものであったことを示唆している。

「私は，人民の自由の大原則が進展しつつある時代に生きていることを感謝する。また平等な権利の国に住み，信仰の自由，言論の自由，新聞の自由，他の権利を犯さぬかぎり行動の自由を持っていることを感謝する。」(41. 12. 2) これは感謝祭の日の日記であるので，いつもより調子が高まっているが，フランシスの信念は，新聞のみではなく，さらに広い歴史や宗教についての読書にささえられていた。彼が読書を好むことはすでに述べたが，冬が長く，教育の普及度も高かったヴァモントでは，読書を好む者は多く，19世紀初頭から会員制の貸出し図書館もあった。フランシスが特に感銘を受けたのは，例のバンクロフトの『アメリカ合衆国史』であった。「これはかつて読んだ内で，最も興味深く，優れた歴史書だ」(42. 11. 13)「彼が，われわれの同国人であることを思うと，アメリカ人の胸は熱くなり，感激に燃える。アメリカはかかる同胞を誇るべきだ」(42. 11. 15) という程の熱の入れようである。(22)

バンクロフトの如何なる点が，フランシスをゆり動かしたか。「バンクロフトはロジャー・ウィリアムズを高く評価している。2世紀も前のロード・アイランドに，信仰の自由，民衆の自由，そして今日われわれが有すると同じように純粋な民主主義を信奉する人がいたとは本当だろうか。……ロジャー・ウィリアムズは200年も前に，現在と等しく純粋な知的自由の大原則を唱えたのだ」(42. 12. 10) という記入にもあるように，フランシスは，アメリカにおける自由の伝統と，その進展を述べるバンクロフトにひかれた。1834年に出版された第1巻の序文に，「私はこの最初の時期をかなり詳しく扱った，というのは，そこにわれわれの制度の芽生えがあるからだ。……植民地の魂は最初から自由を求めた」と著者は書いているが，フランシスはバンクロフトにとって良き読者であった。(23)

ロジャー・ウィリアムズについての記述がフランシスの注意をひいたのは，彼が上の日記を記入した1842年に，同じロード・アイランドで例のドーア戦争が起ったからでもあった。ロード・アイランドは1840年に至っても植民地時代以来の特許状を保持し，選挙権は土地所有者たるフリーマンと，その長男にのみ与えられていた。ヴァモントをはじめ，ほとんどの東部諸州では選挙権のための財産資格はすでに廃止されていたから，ロード・アイランドの状況はいかにも時代おくれに見えたであろう。同州内でこれに不満な人びとはトマス・ドーアにひきいられ，州憲法改正の運動をおこした。1842年5月，ドーア側はいわば人民政府を樹立し，旧来の政府と武力衝突になりかけたが，結局敗退した。このいきさつを，フランシスは同年7月4日の独立記念日の日記に次の如く記す。(24)

「われわれの父祖が独立宣言に署名してから66年がたったというのに，今なお，ひとつの州はチャールズ2世によって与えられた特許状によって縛られ，自由を求めて戦いつつある。ロード・ア

注 (22) ヴァモント人が読書好きなことについては，Stilwell, *Migration from Vermont*, 114. バンクロフトの書物は George Bancroft, *A History of the United States*, vol. 1 (Boston, 1834).

(23) Bancroft, *History*, vii. なお，ロジャー・ウィリアムスについては397ページ以下に記述がある。

(24) Peter J. Coleman, *The Transformation of Rhode Island, 1790-1860* (Providence, 1963), 254-94.

イランドでは，134ドル以上の価値のある土地を所有せぬかぎり投票できず，しかも土地所有者の過半数が認めぬかぎり投票資格が与えられない。また土地所有者しか陪審員になれない。……かかる政治制度に対して，76年〔独立の際〕の愛国者は何というであろうか。これが自由だというであろうか。否，これは最も憎むべき圧制として抵抗されるであろう。私が大変おどろいたことには，かの啓蒙的牧師で，偉大な道徳哲学者フランシス・ウェイランドが，旧来の政府側を弁護している。彼いわく，人びとには政治体制を変える権利はなく，既存の法制度の下でしか行動できない。また，州憲法改正派が現政府をくつがえそうとする運動は，社会に対する重大な犯罪であり，神に対する反逆であるという。これほど強い王党派的主張があるだろうか。」

ウェイランドはブラウン大学総長であり，多くの著作もあったから，フランシスは多分その書物を読んでいたに違いない。上の日記でふれられているのは，1842年5月22日，ウェイランドが，プロヴィデンス第1バプチスト教会でおこなった説教のことと思われる。これは，ドーア側の武力蜂起が失敗に終った次の週のことである。この説教の中でウェイランドは，投票権に関する自分の考えは，「皆さんも御存知のように，その拡大に賛成してきた」と前おきし，但し，今回の事件は法と無法との対立であり，物事が「投票箱ではなく，大砲の砲口で」決められようとした点に問題がある，とする。そして，ドーア側の試みが成功すれば，法の支配ではなく，力の支配になったであろうと言い，流血の惨事にならなかったことを神に感謝している。なお，例の特許状にふれ，面白いことにはバンクロフトを引用し，「権威ある歴史家バンクロフトは，特許状による政府は当時における真の民主主義だった，と明言している」と述べている。そして，投票権拡大がもっと早くおこなわれていれば良かった，というのが大方の意見だろう，とも言う。しかし，今回の事件では，力によって政府をくつがえそうと点が良くないと結論しているのであり，読み方によっては良識的意見ともいえる。(25)

しかし，自由と権利の平等を求めるフランシスにとって，ウェイランドの見解は保守的で「王党派的」と思われたのであろう。「偉大な道徳哲学者」で高名な牧師の権威に，必ずしも盲従しなかった読書好きな農民の存在に，ジャクソン期の一面がかいま見られるかもしれない。もっとも，ドーア戦争には政党間の争いがからんでおり，他州でも政治的に利用された。そしてウェイランドの説教が印刷されると，すぐに反論が出されている。したがってフランシスも，ドーア側を支持する民主党系の新聞論調に影響されたに違いない。とはいえ，フランシスが自分自身の独立した考えを持ち，読書においても，受け身一方のそれではなく批判的姿勢を保ったことは確かである。この点を，ロバートソンの歴史書に対する彼の反応から示したい。ヴァモントの寒村に，自由で批判的な精神が育っていたことが分かるであろう。(26)

注 (25) Francis Wayland, *The Affairs of Rhode-Island, A Discourse delivered in the Meeting-House of the First Baptist Church, Providence, May 22, 1842* (Providence, 1842).

(26) 反論の一例として A Member of the Boston Bar, *A Review of President Wayland's Discourse: A Vindication of the Sovereignty of the People, and a Refutation of the Doctrines and Doctors of Despotism* (Boston, 1842).

ウィリアム・ロバートソンは18世紀スコットランドの歴史家であったが，当時は人気が高く，とくにその『アメリカ史』(1777) は広く読まれたようである。フランシスは，バンクロフトの書物より前に，ロバートソンの上記の著書を読んでいる。フランシスの日記には，その日に読んだ部分の要約と感想が記されており，コロンブスがインディアンを不当に扱ったのは怪しからんとか，ラス・カサスがインディアンの奴隷化に反対しながら黒人奴隷を認めたのは首尾一貫していない，などと記す。ロバートソンは，インディアンについて，かなり詳しく書いているが，その部分にくると，フランシスには承服できぬことも多い。例えば，インディアンは，ひげや体毛がなく，男らしさを欠くという記述や，女性の美しさに無感覚という説明に対し，インディアンはヨーロッパ人と十分に戦ったし，女性への情熱を強く持つ部族もいると反論している。(41.12.4) また「ロバートソンは，この不幸な種族に対する偏見，もしくは無知から，いくつか誤りを犯している。彼はインディアンについて，今ほど知られていなかった時代に書いたから，多分，無知からだろう。……しかし，偏見がなかったとはいえまい」(41.12.9) とも記している。(27)

ロバートソンはインディアンの劣等性を説くことにより，結局，白人による征服を正当化しているのだが，これにフランシスが反論しているのは，少々皮肉な感じもする。フランシスが尊敬するアンドリュー・ジャクソンこそ，インディアンを不当に扱い，彼らを追いやった張本人だからである。また，フランシスにしても，後に西部へ移住し，現実にインディアンに接すると，いささか調子が異なる。五大湖近くで，指で食事をしているインディアンを見て，「彼らは，あわれで，きたならしい種族だ」(46.5.2) と書くときには同情も残っている。しかし，太平洋岸への幌馬車隊での旅の際には「ポーニー族は，かなり大勢，近くまできているが，われわれも準備はできている。」(52.5.28)「インディアンは，人をつかまえ衣服をはぐそうだが，われわれは大部隊で野営しているから安全だと思う」(52.5.30) などと記している。知識の段階と現実に接触した段階では，感じ方に差が出るのもやむを得まい。ともあれ，知的なレヴェルにおいて，フランシスが批判的精神を有し，インディアンに対しても，必ずしも偏見をいだいていなかったことは記憶さるべきであろう。

5

ジャクソン期のアメリカは，ナショナリズムの高揚した時代でもあった。バンクロフトのアメリカ史は，そのひとつの表現であったが，フランシスの場合，ナショナリズムはいかなる形をとって示されたであろうか。

例のロバートソンについて，「彼はたいへん知識が豊かだ」と尊敬しつつも，教会の中では「貴族的」だったらしいと記し，「彼は原則的にはリベラルだったが，自分と異なるものすべてを疑い

注 (27) William Robertson, *The History of the Discovery and Settlement of America* (New York, 1832) フランシスの読んだのが，どの版かは不明であるが，この版では Book VI (122-196) の後半に，インディアンについての詳しい記述がある。

の目で見た」と書いている一節がある。それに続けて「われわれが，信仰の自由を持ち，好みの教義を信じ，好きな教会へ行け，他人の権利を侵さぬかぎり好きなことのできる国に住むことを感謝しよう」(41.11.21) とフランシスは書く。類似の文章をすでに引用したが，フランシスにとっては，アメリカの自由こそ貴重なものであった。そして，このことはイギリスの状態と比較するとはっきりする。彼は，後に述べるようにケンブリッジの神学者であったウィリアム・ペイリーの『自然神学』を読んで，大いに感銘を受けるが，その同じ著者の『道徳および政治哲学』については異なる感想を持った。(28)

「この書物に関しては，好きになれぬ点がある。イギリス人の書いた本は，わが国の若者を導くには適当でないと思う。彼等は貴族政治を好み，上流階級と金持ちを尊重するが，いやしい生れの者に対しては，いかに徳性が高くとも軽蔑する。これは，わが国の平等の原則と異なる。才能があり徳の高い者は，貧富にかかわらず尊敬されるのだ。わが国の若者を，自由な憲法を尊重するよう導くためには，わが国の著者の本が良い」(42.3.28) というわけである。そして，フランシスのナショナリズムは，しばしばイギリスへの嫌悪という形をとる。例えば，イギリス人はボナパルトを嫌うが，これには異論があるとして「イギリスほど領土拡大の野望を持った国があろうか。イギリス人ほど圧制的，高慢，横暴そして利己的な国民があろうか」(41.12.17) と書く。また，カナダとアメリカの境界をめぐる紛争や，オレゴンの領有権をめぐる問題にふれて，「偽りと，うそと，残酷さと，貪欲とが，世界中でのイギリスの足跡なのだ。……高慢なイギリス人に，われわれの権利を主張し，他の権利を尊重することを教えてやるべきだ」(41.12.24) とも記す。(29)

イギリスを嫌う理由は，それが貴族主義だからである。「イギリスからのニュースは悲惨だ。貧民は飢え死にし，何千もの人が職を失っている。イギリスよ。自領の奴隷を解放する慈善と人間性を有しながら，自国の人びとを苦しめている。そして，これはすべて貴族制によるのだ。公爵や伯爵の給料，国教会の費用などなど。アメリカを，国民の生き血を吸う貴族の群れから救いたまえ。」(41.12.30) すでに，フランシスが民主党とホイッグ党の対立を，民主主義対貴族主義としてとらえたことを記したが，その図式はここでアメリカとイギリスの対比におきかえられている。フランシスにとっての自由と平等は，国内における政治的原則というだけでなく，ナショナリズムの基礎でもあった。

ところで，ナショナリズムが，対英戦争の英雄ジャクソンに対する熱狂的賛美に結びついた如く，ジャクソン期アメリカの社会的運動には，しばしば「熱狂的」という形容詞がつけられ勝ちである。これは見方によれば冷静なエリートによってあやつられる熱狂的大衆ということになり，一般庶民

注 (28) William Paley, *Principles of Moral and Political Philosophy* (1785). ペイリーの全集は，1810年から1840年にかけ，アメリカ各地で出版されている。カーティーによれば，この『道徳および政治哲学』は，当時のアメリカの大学で人気のあるテキストだったという。フランシスは，そのことを知っていたようにも思われる。Merle Curti, *The Growth of American Thought*, 3rd. ed. (New York, 1964), 366.

(29) オレゴン問題については，Frederick Merk, *The Oregon Question: Essays in Anglo-American Diplomacy and Politics* (Cambridge, Mass., 1967).

に対する低い評価をもたらしている。ここで，熱狂的運動のひとつであった禁酒運動に，フランシスがいかなる態度で参加していたかを見よう。ヴァモントにおける禁酒運動は，信仰復興運動と共に1820年代に始まり，各地に禁酒運動の支部がつくられた。1830年代初頭，州内に200以上の禁酒クラブがあり，ホテルの酒場を閉鎖させたり，酒の配売を非難したりした。全国的運動としてのワシントニアン運動は1840年に生れ，翌年ヴァモントに入ってきて禁酒集会で多くの参加者を集めたが，フランシスが日記をつけ始めたのは，この頃であった。(30)

彼は禁酒についての講演を聞きに行くが，「禁酒をとなえる人が，リンゴ酒を飲むのは奇妙だ」(42.1.5) と考える。なお，禁酒運動とはいっても，英語では Temperance であって，必ずしも全面的禁酒ではない。とくにブドー酒，ビール，リンゴ酒は，禁止の対象に入らぬことが多かった。さらに同年2月21日の日記には次の如く記している。「禁酒集会に行き，講演を聞く。協会が結成されたので参加したが，その誓いの文句には不満だ。それには蒸溜酒と発酵酒しか入っていない。人びとはあの有害で不潔なかみタバコをやめないのか。一方について節制し，他についてはしないのか。かみタバコのジュースを口からたらしながら禁酒をとくのは，なんという光景だろう。」そこで翌日「私は自分なりの禁酒の誓いをつくった。そこには煙草，かみタバコ，かぎタバコ，茶，コーヒーも，酒に加えておいた。人びとは，これに署名し，あの奴隷的習慣から逃れ，自由で理性的存在となるだろうか。いや，なりそうにない」などと書いている。

フランシスが禁酒運動に賛同したのは，新聞記事で「マサチューセッツで，救済の対象になっている貧民は13,148人，そのうち飲酒による者は7,248人である」(42.1.19) などという事実を知ったことにもよろう。さらに，ある日の講演で，身体への害を知る。「カッシュマン氏の講演に行く。彼は飲酒と人間の身体との関係を良く知っており，人間の胃の図を示した。健康で酒を飲まぬ人のそれと，いろいろな程度の酒飲みのものだ。」(42.3.18) そして，健康人と飲酒家の胃では，色も形も違う。酒が身体に影響しないという者もいるが，眼を見れば，アルコールが影響することは明らかだ。アルコールを口に含めば，口中が熱くなる。したがって胃にも当然影響がある，と納得させられたのであった。フランシスは，いわば科学的に酒の害を知り，合理的判断にもとづいて禁酒運動を支持したのであって，単に熱狂的に禁酒を唱えたのではない。

なお，禁酒運動は，政治的には民主党よりはホイッグ党に結びつくものであった。民主党の有力な支持基盤は都市の外国移民であったが，彼らは禁酒運動に好感を持っていなかったからである。フランシスの住んでいた村では，外国移民は問題とならなかったが，ともあれ，フランシスが政党支持とは切り離して禁酒運動を考えていたことは明らかである。こうした点にも，彼の姿勢がうかがわれる。(31)

合理主義という点では，彼の死刑反対の考えも，その例といえよう。「死後の賞罰を信ずるキリ

注 (30) Ludlum, *Social Ferment,* 64-79. なお，禁酒運動については，Joseph F. Kett, "Temperance and Intemperance as Historical Problems: Review Essay," *Journal of American History,* 67 (March, 1981), 878-885.

(31) Barron, *Those Who Stayed Behind,* 115-120. ここには近くの村の状況が書かれている。

スト教徒が，どうして死ぬ準備のできていない犯罪者を処刑できるのか。われわれは人に生命を与えられぬのに，人の生命を奪ってよいのか。それは神にそなわる力を人が持っているように振るまうことではないのか。……犯罪者は終身刑として，その行為を反省さすべきだ」(42.1.21) というものである。ところで，ここに一寸顔を出す宗教的な面においても，フランシスの合理性がうかがわれる。彼の時代は，まさに熱狂的宗教の時代であり，信仰復興運動の熱気はまださめていなかった。彼が，ミラー派の終末説に心を動かされたことは，すでに引用した文章からも明らかであろう。1842年12月12日の日記は，その頃の雰囲気をよく伝えている。(32)

「昨日，教会に行き，感動的な時を過した。教会は満員だった。スウィッチェル師が最後の審判の日について説教した。それは今年中かも来年かもしれぬが，ともあれ生きていれば，じきに神のトランペットの響きを聞くだろう。……夕方の説教の後，フラー師が信仰を求める人は前に出て来なさいと言い，皆が彼等のために祈るだろうと言った。多数の者が前へ出たが，彼等がその良き道を続けることを望む。私は自分がより貧しく弱くあれば，十字架をになえたのに，と思う。」(42.12.12) フランシスは，メソジスト教会に属していたから，ミラー派的終末論には親しんでいたかもしれない。しかし彼は，早くから理神論の入ってきていたヴァモントの宗教的風土の影響をも受けていた。そして，彼の宗教心は，前述したペイリーの『自然神学』に，よりひかれたのである。(33)

ペイリーの著作は，アメリカにおいて広く読まれていたらしく，1810年～12年にボストンとニューポートで全集が出版され，その後ニューヨーク，ケンブリッジ，フィラデルフィアでも全集が出ている。とくに『自然神学』は人気があった様子で，1803年のオルバニーでの出版を最初に，ニューヨークやボストンで，何年かおきに，くりかえし刊行されている。もちろんイギリスで出版されたものも入ってきていたが，フランシスの読んだのは，1839年にボストン，または1840年にニューヨークで刊行された挿絵入りの書物であったかもしれない。1842年2月13日，「ウィリアム・ペイリーの自然神学を読みはじめた。これは無神論に対する強力な反論であって，ペイリーを論破することはできない。正気の人であれば，自然が偶然によって生じたなどと考えられるだろうか。……すべては完全な秩序の下に動いている。そして，ソロモンと同様，われわれは，人間がいかに上手くつくられているかに感嘆する」とある。

ペイリーの書物は，路傍に小石と時計が落ちている話から始まり，時計を拾った人は，それを誰かが何らかの目的で作ったと知るだろう，として自然界の造り主に話を進めてゆく。この最初のあたりの巧妙な論法に，フランシスは感じいったのであろう。彼は農閑期のこの時期，ほとんど毎日ペイリーを読み，そのノートをとった。1842年3月24日，「私はペイリーの自然神学を二度くりかえして読んだ。そして，また楽しく読めるだろうし，何か新しいことを見出すだろう。新しいことでないにせよ，新しい考えを加え，精神を高め，感情を高揚させる点で，他のいかなる本にも勝る。

注 (32) ミラー派については注(7)を見よ。

(33) William Paley, *Natural Theology: or Evidence of the Existence and Attributes of the Deity, collected from the Appearance of Nature* (Boston, 1829) これは挿絵入りのものである。

それは神の存在についての反駁できない議論であり，自然に計画があり，計画者がいることを示している」と記している。フランシスは，もちろん良き信者であり，信仰心も厚かったが，ペイリーの議論を読んで，更めて納得するところに，その基本的姿勢が示されている。しかも，同じペイリーの書物でも，道徳哲学の本には批判的である点などは，フランシスの面目躍如たるものがある。

彼のキリスト教信者としての生活態度は，禁酒にも，主日を守る点にも現われている。後年，オレゴンへの移住の旅の途中，幌馬車隊が日曜にも旅を続けることに文句を言っている。「オレゴンへの道とは，何たるところだろう。すべての宗教や教えは投げすてられ，先へ急ぐばかりだ。……主日について，主への義務について何も言われない。ここにも神はおられ，ここで神につかえることもできると思うが」(52.6.27) という調子である。もっとも，健全な常識を持つフランシスは，文句を言いつつも隊と共に進む。宗教にとらわれすぎては，生命が危険だからである。

ところで，フランシスが幌馬車隊と共に進みつつも，それに批判的感想を抱いた如く，彼はジャクソン期に生きつつも，その風潮に流されてしまってはいなかった。1841年の感謝祭の日，「今日は，ピューリタンの父祖たちが神への感謝のしるしを捧げた日だ。それは厳かな行事で，皆が心をそろえることが求められた。しかし，今や，何たる変化だろうか。今では感謝の日というより，お祭りさわぎの日と呼ばれるべきだ。それは今では，舞踏会や，パーティーや，すべて楽しみの機会の日だ」(41.12.2) と記している。また，新年に教会に行き，次のような感慨を抱いた。「フラー師が，貧者に対して寛大であれと説教された。……ある人びとの心は，すべて富を得ることに向けられ，ほかのことは何も考えない。一切が富を得ることに吸収され，精神は狭められ縮まってしまう。……われわれは，心をひろめ，自身を高貴に，慈悲深く，寛大に，そして人間らしくするものをこそ求めよう。それは知識だ。」(42.1.2) ジャクソン期アメリカの卑俗さや金銭万能主義に対して，軽蔑の念を抱いたのは外国人旅行者のみではなく，東部の農村にも批判する目は存在していたのである。

6

ヴァモントの寒村に住むひとりの農民が，当時の政治，経済，あるいは社会のあり方に対して，いかなる考え方をしていたかを紹介してきた。いわば声なき声であったフランシスの日記は，当時の庶民をあまり低く見てはいけないという警告のようにも思える。ジャクソンや民主主義を讃える彼は，単にエリートにあやつられ，世の風潮に流されていたのではなかった。そして，経済的には楽といえぬ暮しの中で，家族との生活の幸せを守ろうとしていた。

「私が結婚して1年たった。この1年間は幸せで，短く感じられた。独身の者は，本当の幸福が何であるかを知らない。それは結婚してみなければ分らない。人の一生は，4巻からなる本のようなものだ。結婚したことのない人は，最初の1巻しか読んでいない」(42.4.25) と結婚生活の幸せを説いたフランシスに，やがて子供が生まれる。「朝の8時，私のエリザベスは，すばらしい息子

を贈りものしてくれた。何と貴重な責任だろう。何と大きな喜びを与えてくれる贈り物だろう。われわれの結婚の最初のしるしだ。……エリザベスは元気そうだ。今や彼女は，これまで以上に大切だ。両親の責任は何と大きいことか。幼い者を正しく育ててゆかねばならない。私にそれができるだろうか。私は贈り物への喜びと共に，責任の重さにふるえる。……この幼い木を，知識と徳において，彼自身の幸福と他への善になるよう育てられますよう。神のお恵みで，この木が高く，すこやかに育ち，よい実をつけますように」(42.6.18) と彼は書いている。

フランシスには兄弟がいたが，当時，父の農場に残っていたのは彼だけで，ある者は50マイルほど離れた場所に住み，他はニューヨーク州西部に移住してしまっていた。その頃のニューイングランドでは，父親の引退後，末子が農場を継ぎ，両親の面倒を見ることが多かったが，フランシスもそうする筈であったかもしれない。彼が父の農場を小作したのも，その準備であったろう。しかし，母親は1842年12月に死去し，数年後に父親は農場を手放す。1845年4月10日の日記にはこう記されている。「ジョセフ・ボウマンのため，2週間6ドルで働くことになった。父が彼に売った農場で働くというわけだ。農場は先週の水曜に売られたが，書類はまだできていない。父は農場を保ち，私は彼と一緒に住んで世話をしてゆくものと思っていたが，思わざる困難から農場は売られてしまった。しかし，私が健康である以上，こうなってしまった方が良かったのかもしれない。」

上の文章の最後の部分が楽観的なのは何故か。これは，フランシスの性格にのみよるものではなかろう。むしろ，当時の状況を考えてみれば，ヴァモントの農場に留まっているのは最良の選択とはいえなかった。父親の農場があるかぎり，西部への移住には，ためらいもあったに違いない。しかし，今や条件が変ったとなれば，他の多くの若者と同様，フロンティアを目指すこともできる。かくして同年9月には彼もイリノイへ向うことになるが，それは，とりあえず賢い選択であった。「イリノイの美しい土地で働きはじめた。ここで働くのは楽しみだ。土地は平らで，石ころもなく，耕作も容易だ。ニューイングランドの人間には喜びだ」(45.10.17) という記入や「とても暖かく，11月ではなく9月のようだ。ヴァモント人は，この気候をどう考えるだろう。彼らは，寒い雪の山を去って，この西部の美しい気候を味わってみるべきだ」(45.11.16) などという部分に，彼の喜びが感じられる。フランシスが，こうした日記をつけることができたのも，西部の存在のおかげであり，西部は東部農村の競争相手であったと同時に，救いの神でもあった。かかる機会の存在が，東部農村の暗さをやわらげ，当時のアメリカに若々しさを与えていたことは否定できない。この世の終りが東部に来ようとも，西部での再生の可能性は残されていた。

さて，客観的にいえば，フランシスは成功した農民ではなかったし，イリノイへの移住も成功を約束するものではなかった。移住それ自体も，英雄的な行為ではなく，やむなく選択した道にすぎない。しかし，彼は古いものにしがみついたり，反理性的行動に走ったりはしなかった。工業化，都市化，西漸運動のうねりの中で，景気変動にもまれつつも，フランシスは自由と平等の原則を尊重し，民主主義を信じ，歴史や宗教について考えた。彼の民主党支持は，ジャクソン賛美に結びついていたとはいえ，決して盲目的ではなかった。関税や紙幣の問題についても，それなりに筋道を

立ててていたし，他人の意見にふりまわされてはいなかった。彼の民主主義やナショナリズムは，決して感情的ではなかったし，そのことは信仰についてもいえる。合理主義と批判的精神が，フランシスの生活と思索の特徴であった。家族や結婚についての考え方にしても，前近代的などとは到底いえない。もちろん，ジャクソン期のアメリカには，デマゴーグやえせ道徳家もいたし，怪しげな宗教に踊らされる大衆も存在した。しかし，かつて庶民の時代と呼ばれ，知的興隆の時代とも呼ばれたジャクソン期を魅力あらしめたのは，フランシスのような人物の存在ではなかったろうか。

（経済学部教授）